

皆さま

その 13 をお届けします。

今月は 3 連休が 2 回あり、一回目はオルレアンに行ってきました。帝京大学は国際化をいろいろやっていて、ことしからオルレアン大学で仏語短期研修を始めました(3 週間)。そこで訪問してみたわけです。大学付属のランゲージ・スクールが海外留学生を受け入れます。

昔、Tours の語学校で研修をしたころを思い出しました。そのあと研修 2 年目はパリでした。この時厳しく、暖かい監督者だったのが会社の先輩の池上さんです。

オルレアンと言えばジャンヌ・ダルクですが、聞いてはいましたが英国での知名度は低いですね。そもそもジャンヌ・ダルクと言ってもみんなぼかんとします。ジョアンヌ・オブ・アークと呼ばないと通じません。100 年戦争で英国を破ったから、英国人はその事実を無視したがるという俗説も当たっているのかもしれませんが、フランスで何で英雄なのかは、本当に限られた英国人しか知らないようです。

増淵 文規

### 英国ダラム便り (その 13)

～サッチャーさんへのオマージュ～

[北東イングランドと日本]

マリー・コンティヘルムという日本研究者の本(翻訳されている)で知ったことです。

ダラムから 30km 離れたニューカッスルは北東イングランドを代表する都市です。産業革命から 1970 年代くらいまで、石炭鉱山、鉄鋼、造船業などの重工業の一大中心地でした。産業革命の最盛時、1847 年にアームストロング氏がこの地で会社を起こしました。アームストロング砲という大砲と、軍艦製造で世界に名を成した会社で、1900 年前後には日本海軍が重要顧客でした。軍事関係には極めて疎い私でも東郷元帥の名前は知っていますが、当時のニューカッスルあたりでは「トーゴー」の名前を知らない人はいないくらいの存在だったようです。英国にとって永年の目障りで憎いロシアを破った英雄ですし、大事なお客さんでしたから。アームスト

ロング社以外の造船所も含め日本海軍関係者のニューカッスル詣では1913年ころまで続きます。東郷元帥も来ていて、ニューカッスル・ユナイテッドのサッカー試合を観戦したそうです（若いころに5/6年英国海軍に留学しているんですね）。その後日本が自前で軍艦、武器を製造できるようになり、ニューカッスルとの関係は薄れていき、第2次大戦で当然のことながら対日感情は悪化します。戦後の皇室平和外交の一環で1954年に英国を訪問された19歳の明仁皇太子（天皇陛下）は静養も兼ねニューカッスル地域で1週間以上過ごされています。日本との歴史的な関係のあらわれでしょう。その時ダラムにも立ち寄られ、古城や大聖堂を見学されました。ダラムの南東50kmにあるミドルスバラという港町には、その昔日本郵船の定期船が立ち寄っていて、そのまま住みついてしまった日本人船員が何人もいたそうです。上級船員ではなく、釜炊きや炊事人といった人たちで、外国に新天地を求め英国人の妻をめとり、遠い祖国に戻ることもなく、主として現業的労働で生計を立てていました。彼らはハワイやブラジル移民とは違い、日本との縁を完全に断ち切っていたようです。数少ない日本人仲間とおしゃべりが唯一日本を思い出すひと時だったのでしょう。戦争中はつらい扱いを受けたようです。ここにも小さな移民の歴史があったことはこの本に出会うまで全く知りませんでした。

ニューカッスル周辺の重工業は衰退の一途を辿り、石炭業も1970年代に姿を消します。

先の無い石炭業に引導を渡したのがサッチャーさんでした。彼女が引導を渡さなくても、昔ながらの坑道掘り方式の石炭業に行き残る道はありませんでした。それでも「サッチャーが石炭業を潰した」ということで、この辺での人気はさんざんです。その後脱重工業化を目指して新産業づくりに励みますが、なかなか良いのが出てこない。そんな中でキラリ光るのがニッサンを中心とする日本企業の進出です。ニッサンも当地への進出にはずいぶんと迷ったようです。サッチャーさんが日本に来た時にニッサンの社長に直々に頼み込んでいます。英国ニッサンは

今や英国を代表する自動車企業で、6,000人以上の雇用を創出しています。下請関連企業も潤っています。日本人は4人だけだそうで、完全に英国企業として地元には溶け込んでいます。ニッサンに前後して多くの日本企業がやってきました。勿論サッチャーさん一人の力ではありませんが、あの頃の英国の外国企業誘致運動はそれは力が入っていましたね。仕事で担当でしたから良く覚えています。優遇措置も半端ではなかったですね。サッチャーさんがいなかったらあれだけの力仕事はあり得なかったでしょう。「怠け者の英国製造業を救うためにこれ以上ビター文も出せないわ。そんなものを延命させる必要はない。代わりに優秀な外国企業に来てもらえばいいのよ。英国に来れば皆英国企業になるんだから、本社の国籍なんか関係ないわ」てなことをおっしゃって、決断のできないおじさん古株議員たちの反対をぶっ飛ばしたのでしょう。日本他外国勢の進出は雇用機会の少ない北東イングランド地元で歓迎されていますが、その立役者のサッチャーさんへの賛辞の声を聞くことは残念ながらほとんどないですね。

#### [フランス国民の不安]

ルモンドに欧州6カ国国民の将来生活に関するアンケート結果が出ていました。途上国のポーランドを別にして、英国、ドイツ、フランス、イタリア、スペインです。自分の子供の生活が自分より悪くなると思っている比率は、フランスがダントツで72%。英国が最も低く45%。両国の景気の現状は多少英国の方が良いかという程度なのに、この差は何だろうかと思います。中庸、現実主義者の英国人は必要以上に将来をおおげさに悲観したりしないのかもしれませんが、同誌で識者が指摘していますが、フランス人は「今はドイツと同じような生活水準だけれど、もう無理だね」とか「Etat-Providence（福祉国家）の終焉危機」を感じているようです。労働者に甘く、社会保障負担などで企業に厳しいフランス型資本主義の限界が言われて久しいです

が、いっこうに変わる気配を見せない。「あなたたち、ぐちゃぐちゃ言う前に働いたらどうなの。嘆くのはそのあとにしなさい」とフランス人を叱っているサッチャーさんの声が聞こえるような気がします。

ダラム大学 **St Mary** カレッジの副校長（63歳 女性）は英国の製造業を潰した犯人と言って大のサッチャー嫌い。帝京ダラム校の事務長は英国空軍出身でフォークランド戦争に参加。当然サッチャーさんを尊敬しています。私の周りには好き嫌いから言えば、サッチャー嫌いの方が圧倒的に多いようですが、結構心の中では「英国人の誇り」と感じているのではないのでしょうか。私は好きでしたねー。英国人の怠けもの根性をたたき直した。それに何と言っても凜として美しかった。

2013年5月10日

増渕 文規